

14世紀イギリスのヨナの物語

奨励	秋篠 憲一〔あきしの・けんいち〕
奨励者紹介	同志社大学文学部教授
研究テーマ	中世イギリス文学（アーサー王ロマンズ）

主の言葉がアミタイの子ヨナに臨んだ。「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった。ヤッファに下ると、折よくタルシシュ行きの船が見つかったので、船賃を払って乗り込み、人々に紛れ込んで主から逃れようと、タルシシュに向かった。

（ヨナ書 1章1―3節）

物語が書かれた時代

ただいま旧約聖書のヨナ書の冒頭の一節を読んいただきましたが、本日は、14世紀イギリスで書かれましたヨナの物語についてお話をさせていただきます。

14世紀イギリスは宗教的にはまだカトリックの時代でした。この時代はまさに激動の時代で、イギリス王のフランスにある領土とフランスの王位継承権をめぐるフランスとの百年戦争、また封建体制への農民の不満が爆発した農民一揆が起り、さらに黒死病（ペスト）の流行によりイギリスの人口の3分の1が犠牲になりました。またオックスフォード大学の神学者ジョン・ウィクリフが聖書中心の信仰を唱え、聖書の英語訳を試み、異端者の烙印を押されます。またこの時代は書き言葉としての英語の復活の時代でもありました。1066年のノルマンディー公ウィリアムによるイングランド征服以降、フランス語しか話せない王たちが国土を支配することになり、英語は話し言葉としてのみ使われ、屈辱的な境遇を味わってきました。英詩の父と言われるジェフリー・チョーサーが傑作『カンタベリー物語』を書いたことは、書き言葉としての英語の復活を象徴する出来事です。

『忍耐』について

このような時代に、これからお話すヨナの物語、すなわち『忍耐』と呼ばれる作品が書かれました。作者についての詳細は不明です。おそらく14世紀後半にこの作品を書いたと考えられます。散文ではなく詩で書かれた作品を収めた写本がただ一つ、大英図書館に所蔵されています。作者は主として、ウルガタ聖書（聖ヒエロニムスが405年に完成させたカトリック教会公認のラテン語訳聖書）を典拠として使い、もともと短く、解釈が難しいこの旧約聖書の物語に加筆し、531行の詩として完成させました。おそらく、ラテン語の聖書が読めない聴衆にヨナの物語を英語で語り、楽しませながら、人びとに教訓を導きだすように促したものと考えられます。また、たとえラテン語を理解できる聴衆であっても、詩人の聖書解釈と翻案の技に興味を抱いたかもしれません。また作品の長さから考えて、一回の朗読で作品のすべてを語り終えたと思われます。旧約聖書のヨナ書は教訓的物語、物語形式の説教と考えられていますが、イギリスでうまれたこの作品も説教の形式をもっておりです。それでは、これからイギリスのヨナの物語を旧約聖書のヨナ書と比較しながら、この逸名の作者がどのようなヨナを描き、われわれに何を伝えようとしているのかを皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

序（プロローグ）について

この作品はまず序（プロローグ）から始まります。「忍耐こそは美德である、だがしばしば人を不愉快にさせるが」（1行）という言葉でこの作品は始まります。冒頭に出てくる忍耐という言葉のゆえにこの作品には『忍耐』というタイトルがつけられています。またこの言葉によって、これから忍耐についての説教が始まるのをわれわれは知ります。そしてこの後、マタイによる福音書5章の「イエスによる山上の説教」への言及があります。詩人は特に3節の「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」と10節「義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」に注目します。ただし、10節に関して『忍耐』では「彼らの心の抑えが利く人たちも幸いである、天国は彼らのものである」と修正を加えております。この詩人は、イエスが説いた最初と最後の幸福が同じ酬い、すなわち天の国をもたらすことに着目し、この二つの幸福、すなわち美德を貴婦人にたとえ、貧しさと忍耐の二人の貴婦人愛するよう促します。それではなぜ10節と忍耐を関連づけたのでしょうか。詩人は、10節の「義のために迫害される人々」を「彼らの心の抑えが利く人たち」に変えているわけですが、やがてこの物語では、義のために迫害されることを恐れるヨナ、自己抑制が欠如したヨナが描かれますが、まさにそれは忍耐の欠如を表しています。11節でイエスは「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである」と述べられますが、ヨナの神への反抗、神からの逃亡、そしてそれゆえに味わう苦難と密接な関連性があり、詩人は10節と忍耐という美德を結びつけたのです。

ヨナの逃亡

いよいよ、預言者ヨナと神の関係が語られていきます。旧約聖書のヨナ書では、なぜヨナが主の命令に逆らって逃亡したのか、その動機が語られません。それに比してわれわれの詩人は動機について語ってくれます。神の命令が「不快な罵声」（64行）として彼の耳に届きます。ニネベに行き、「彼らの悪行と悪意に速やかに報復する」（71行）と伝えよという命令です。預言者ヨナは立腹し、「もし私が主の命に服しこの話を彼らに持ち行くと、／その時はニネベで捕まり、わが身の苦難が始まる。／主はかかる裏切りたちは極悪人と私に言われる。／私がそんな伝言を得て訪れると、彼らは即刻私を捕まえ、／牢に閉じ込め、足枷つきの晒台に据えて、／足鎖で私を苦しめ、両目を振り出すことだ」（75―80行）と考えます。ヨナは眼前に自分に對する悪人どもの迫害の有様を想像力豊かに思い描くのです。このように旧約聖書のヨナ書では省かれた逃亡の理由を分かりやすく聴衆に説明するのです。このあとタルシシュに向かう船に乗ったヨナのことが極めてリアルな描写とともに語られます。神の命令に逆らった預言者ヨナが乗った船は大嵐に遭遇します。嵐の猛烈さが迫力をもって描かれます。それではヨナは何をするのでしょうか。聖書では「しかし、ヨナは船底に降りて横になり、ぐっすりと寝込んでいた」（ヨナ書1章5節）と述べられていますが、詩人は「彼は海の高鳴りが恐くて逃げ去り／船底に入って、船板の上に横たわっていた。／方向舵のそばに蹲（うずくま）り、天の報復を恐れ、／いつの間にか深い眠りに陥り、涎（よだれ）を流して鼾（いびき）をかく」（183―186行）と語ります。自然の脅威、そして神の報復への恐れにおのきながら、眠ってしまうという、老いぼれのどうしようもない預言者のヨナが描かれます。寝ているところを起こされたヨナは自分が犯した罪を認め、自分を海に放り込めば嵐がおさまると述べます。このあたりは、聖書を忠実に訳しています。船乗りたちはなんとかこの男を犠牲にしないよう努力しますが、それもむなしく、とうとうヨナを海のなかに放り込みます。すると嵐はうそのように静まります。聖書では「人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげ、誓いを立てた」（1章16節）と短く述べられますが、『忍耐』では、船が陸地に到着し、モーセに倣って生け贄をささげ、主を唯一の神として認めたと述べられます。ヨナによる神からの逃亡が思わぬ形で異教徒の改宗をもたらします。

鯨のエピソード

それでは、海に投げ込まれたヨナはどうなったのでしょうか。聖書では、「さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた」（2章1節）と極めて短く述べられ、次に魚の腹の中での主への祈りへと続きます。イエスが、マタイによる福音書12章で、「ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる」（40節）と述べていますが、鯨のエピソードはイエスとヨナを関連づけるものとして有名です。それではイギリスの詩人はこのエピソードをどのように翻案するのでしょうか。このエピソードはこの詩人の特徴を顕著に表しています。水夫たちが預言者ヨナの両足をつかんでいる時に、鯨は大きな口の中に彼の体を呑み込みます。そして鯨の体内での彼の様子が次のように細かく描かれます。「彼は不浄な粘液を過ぎ鰓（えら）を通して滑り込み、／腸を通り転り込むが、腸は彼には道と思われ、／絶えず真逆様に転がり回り乍らも、／遂に大広間にも等しき空洞に到着した。／その場所には彼は足を踏張り周囲を手探りし、／悪魔のような悪臭の胃袋の中に突立つ。／地獄のような臭臭の脂汗と脱糞の中に、／苦痛を蒙（こうむ）らぬように彼の住処を建てた」（269―276行）。神を蔑（ないがし）ろにした預言者にふさわしく、神によって命を救われたものの、あたかも地獄にいるかのような苦しみを味わいます。聖書に加筆することによって、詩人はヨナの罪深さを強調するのです。さらに詩人はヨナによる次のような祈りを加筆します。実はこの物語は清貧と忍耐と同居する宮仕への「私」によって語られますので、厳密に言えば作者と語り手を区別する必要があります。預言者ヨナは「さて、神よ、汝の預言者をお憐みあれ。／私は心中罪深く真心を欠き不誠実ですが、／いまあなたの復讐をばお止め下さい。慈悲の力により。／私は預言者の中の屑に似て、裏切りの罪がありますが、／あなたは神で、すべての善意はまことあなたのもの。／さてあなたの下僕と彼の非行に慈悲を賜わり、／陸と海の主であることを速やかにお証し下さい」（282―288行）と祈ります。また語り手は鯨の腹にいる預言者ヨナについて「斯く獣の腸の中に生きて留まること、／三日三晩。常に彼は神を切に想い、／神のみと神のみ恵み、次に神の裁量を想う。／茲（こ）で順境には看過の神を逆境に知り得た」（293―296行）とコメントをしますが、たとえば地獄のような鯨の体内であっても命が救われたことを神にまず感謝すべきであるのに、復讐をお止めください、慈悲をお与えくださいと願うだけの預言者ヨナは、ただ今の苦しみから逃れたいだけなのではないでしょうか。逆境において、どの程度神を知り得たのかは、はなはだ疑問です。主が命じ、ヨナの祈りの後（聖書の祈りとほぼ同じ内容）鯨はヨナを岸に吐き出します。聖書では「主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した」（2章11節）となっていますが、『忍耐』では「次に彼は汚れた衣服の儘（まま）砂に吸い込まれた」（341行）と語られ、彼の服の汚れはまた彼の罪深さを表しており、効果的な加筆になっています。

ニネベの人びとの悔悛

陸地に吐き出されたヨナは、神の命令に素直に従い、ニネベの人びとに神の言葉を伝えます。聖書では「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる」（3章4節）となっていますが、『忍耐』では「これより丸四十日が経過するとせよ、／その時ニネベは襲われて壊滅する。／まことこの町は倒壊するであろう。／あなたがたは真逆様に奈落の底深く埋没し、／速やかに暗黒の大地諸共吞込まれ、／ここに生くるもの総て死滅することになる」（359―364行）と預言者ヨナは恐ろしさを強調します。また「神の報復がこの町を廃墟と化すであろう

う」（３７０行）と何度も繰り返し、都の破壊が神による報復であると述べます。この後、聖書の内容にほぼ忠実に王をはじめとするニネベの人びとの悔悛の有様が語られます。聖書では王は断食の布告をだし、「人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのおの惡の道を離れ、その手から不法を捨てよ。そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない」（３章８―９節）となっています。一方『忍耐』では王は断食を命じた後、さらに「皆の者が、飢えて苦しみ、力の限り叫ぶように。／慈悲に溢れる神にこの呼ばわりが届くであろう。／神のみ心に適うを如何に知り、如何に知り得ようか、／卓越の気高き主なればみ恵みは深き苦なれど。／主は不快なりとて、み力は実に強大ゆえに、／優しきみ恵みに主は憐れみをも見出すであろう。それで我らの惡しき罪の行いを我らが信じ、／主ご自身が定める道を静かに歩めば、／主は激しい怒りを脱してその憤怒を去り、／我らが彼を神と信ずれば、我らの罪をも許すだろう」（３９５―４０４行）と述べます。『忍耐』の作者は、聖書の言葉をかみ砕いて、分かりやすく説明し、いかに神が慈悲にあふれた存在であり、われわれには計りがたいものであるかを語り手に語らせるのです。しかしながら、預言者ヨナはいかに神が計りがたい存在であるかを理解できないのです。異教徒であっても悔悛と贖罪の実行により報復をお止めになる神の慈悲は、彼の理解を超えているのです。この作品では、ニネベの人びとを模範として、当時の文学作品でも取り上げられた悔悛の秘蹟の大切さが描かれます。

ヨナの怒りの叫び

神がニネベへの報復を中止されたことに対してヨナはどのような反応を示すのでしょうか。聖書では次のように語られます。ヨナは怒り「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。主よどうか、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです」（４章２―３節）と主に訴え、主は「お前は怒るが、それは正しいことか」（４章４節）と問われ、それには何も答えず、預言者ヨナは都の東の方に座り込み、日差しを避けるため小屋を建て、都で何が起こるかを見届けようとしします。聖書ではここで初めてヨナの逃亡の理由が示されます。英詩『忍耐』でもほぼ同じ内容が語られます。

聖書では、神は日差しによるヨナの苦痛を和らげるため、とうごまの木に命じて芽をださせ、彼の頭の上に陰をおつくりになります。ところが次の日、神は虫に命じて木を食い荒らさせ、そのため木は枯れ、日が昇ると焼け付くような東風に命じてヨナに苦痛をお与えになります。またもやヨナは「生きているよりも、死ぬ方がましです」（４章８節）と不平を言い、それに対して神は「お前はとうごまの木のことで怒るが、それは正しいことか」（４章９節）と問われます。それに対する返答は「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです」（４章９節）というものです。すると神は「お前は、自分で勞することも育てることもなく、一夜にして生じ、滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから」（４章１０―１１節）と応じられ、旧約聖書のヨナ書は幕を閉じます。

それでは『忍耐』ではヨナと神とのやりとりはどのように描かれ、作品はどのように終わるのでしょうか。ヨナの怒りの叫びには加筆があります。「ああ、人間の造り主よ、あなたにどんな利があるのか／斯くあなたの子を他に例を見ぬほど破壊せしめて。／可能な限りの辛苦を課し、あなたは私を見逃さぬ。／私は一つの慰めを得たものの今はそれも奪われた、／頭を覆ったあの素晴らしいわが忍冬を。／だが今あなたは私から慰安を奪う決心だと分った。／私を死なせて欲しい。私は生きのび過ぎている」（４８２―４８８行）。ヨナには造り主が彼になぜ辛苦を与えているのかが分からないのです。異教徒の多くの命が救われたのを喜ばず、傍観者として都にまだ何が起こるのではないかと、居心地よい木陰であたかもそれを楽しむように見つめる彼には当然のことかもしれません。聖書の内容に従うと、この預言者ヨナに対して神は、自らが人間を造り彼らを見守ってきた。無辜（むこ）なるものたちだけでなく、惡をなしたものが罪を悔いたがゆえにニネベの都を救ったとしても当然のことである、と述べられます。そして「私がお前のように厳しければ、男よ、災いが降懸ろうぞ。／私がお前のように耐えられずば、大抵の者は栄えまいぞ。／（中略）／厳しさは心に愛しみを欠くと実行が不可能である」（５２０―５２３行）が神の言葉を締めくくることになります。忍耐と愛しみの大切さが強調され、聖書にはない重要な加筆となり、この作品のテーマとも密接なつながりをもちます。

そして詩人は、結びの言葉として次のように述べます。

そのように怒ることなく、殿方よ、おん身の道を歩み、
苦しみに在っても喜びに在っても思慮と忍耐あれ。
自らの衣を破るほどに短慮の者は
更なる失意を抱き縫い繕ひが要ることだ。
為に心の貧しさと悲しみが苛酷に余を苦しめる時、
心静けく忍耐を以て甘受するが余に望ましきこと。
苦悩と悲嘆により豁然と明白になりしことは
忍耐は気高き極致の徳、事毎それは不快な事乍ら。（５２４―５３１行）

詩人はヨナの物語を、忍耐を教えるものとして語りました。この物語ではヨナそしてニネベの人びとに対する神の忍耐と、預言者ヨナの忍耐と思慮の欠如が描かれています。忍耐の大切さを教えるこの物語では、ヨナは反面教師的役割を与えられています。またヨナは人間誰しもがもつ弱点をさらけ出しています。おそらく聴衆はこの預言者の物語を自分たちの日常に起こる問題として理解したことでしょう。たとえ鯨の腹の中で人間が三日三晩生きるなどということは想像を絶する非日常的なことであったとしても。

忍耐と愛

１４世紀のイギリスで、ウィリアム・ラングランドによって書かれた『農夫ピアースの夢』では、愛徳（charity、神の人間への愛、また人間の神への愛、隣人への愛を意味します）について「それは真実、まことにすぐれた樹木なのだ。／慈悲がその根で、その幹は憐愍（れんぴん）。／葉は真実の言葉、つまり聖教会の掟。／咲く花は謙譲な話し方と温和な態度。／この木そのものは忍耐とか、おごりのない心と呼ばれ、／それで、神や善徳の人の手によって、愛徳の果実を結ぶ。」（１６章３―９行）と述べられ、愛徳と忍耐の密接な関連性が指摘されています。神による、ヨナそしてニネベの人びとへの忍耐は神の愛を示すものであり、ヨナの神への怒り、神によるニネベの人びとの救済への不満は、ヨナの神への愛、そして敵である異教徒への愛の欠如を示しています。ヨナの物語は、忍耐とは愛であることを明らかに示しています。もしヨナのような人間がわれわれの隣人だとしたらどうでしょう。たびたび不快な思いを感じながらも忍耐をもってつきあっていかなければならないでしょう。神のような忍耐を示すことは至難の業でしょうけれど。ラングランドの作品では、イエスの受難について「その受苦を見て、人は知らねばならぬ。喜びを求めるならば、／みずから贖罪と清貧に生きねばならず、／この世の多くの苦しみを受けいれ、耐えねばならないことを」（１９章６２―６４行）と述べております。イエスの受難のなかに、計り知れない愛と忍耐の姿を見ることをわれわれに促しております。

〔引用文献〕
境田 進訳『ガウエイン詩人全訳詩集』小川図書 １９９２年
ウィリアム・ラングランド『農夫ピアースの夢』柴田忠作訳註 東海大学出版会 １９８１年